

テーブルシアター台本(複数出演版)

おいしいおかゆ

■人形■

- ・女の子
- ・お母さん
- ・おばあさん
- ・町の人 動物(適宜)


■大道具■

- ・森の中
- ・女の子の家の台所
- ・お鍋の乗ったテーブル
- ・大布(おかゆ)

■小道具■

- ・おなべ
- ・スプーン

■ プロローグ ■




語り 「むかーし…あるところに女の子がいました…女の子はお母さんと二人きりで住んでいました…とても貧乏だったので ある冬の日 とうとう 食べるものがなくなってしまいました…そこで女子は食べ物を探しに森へ出かけていきました[森の中の景を出す]

■ 森の中 ■

女の子 「[下手から登場]やっぱり冬なので食べ物はなんにも見つからないわ…どうしよう…」

おばあさん 「[上手から登場し] おお…お嬢ちゃん…こんにちは」

女の子 「こんにちは…」



おばあさん 「お前さんは食べ物を探しているね…顔にかいてあるよ…ではこれからずーっと食べ物に困らないものをあげよう…[と鍋を出して]ほらこれだよ…」

女の子 「おばあさん…鍋ならうちにもあるわ…ないのは食べ物なのよ…」

v. 1.1

おばあさん「ほっほっほっ…わかってるよ…この鍋は不思議なお鍋でね  
…『小さいお鍋や煮ておくれ…』といえば とてもおいしいお  
かゆを煮てくれるんだ…それにね…こんなに小さいお鍋だけ  
れど食べても食べてもあとからあとからおかゆが湧き出して  
くるんだよ」

女の子 「おかゆがずーっと出続けたらすぐにこぼれてしまうわ…」

おばあさん「大丈夫だよ…おかゆがいなくなったらこういばいいん  
だ…『小さいお鍋や止めとくれ』ってね…間違えちゃいけない  
よ…『止めとくれ』だよ『止めとくれ』じゃ出続けるからね」

女の子 「ありがとう…おばあさん…でも、わたしおばあさんを知らな  
いのにどうして親切にしてくれるの？」

おばあさん「ほっほっほっ…わたしはお前さんをよーく知っているのさ  
…まあいいじゃないか…早く家に帰ってお母さんを安心させて  
おあぎ」

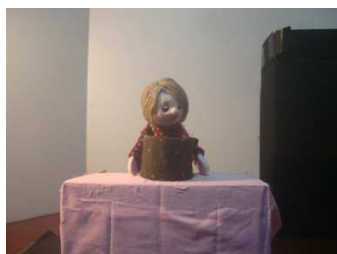
女の子 「本当にありがとう…さようなら…」

おばあさん「はい…さようなら[二人は上手、下手にわかれる ]」

■ 女の子の台所 ■

台所の背景と中央に鍋付きのテーブル

語り 「そこで女の子はその鍋をお母さんの所へ持って帰って それ  
からというもの 二人はいつでも好きな時に おいしいおかゆ  
を好きなだけ食べることができるので お腹がすくことはな  
くなりました…ところが ある日…女の子がよそへ出かけていた  
時のこと…お昼になったのでお母さんはおかゆを食べようと思  
いました…[上手からお母さん登場]」



お母さん 「『小さいお鍋や煮ておくれ』…[鍋をのぞきこんで]まあ…お  
いしそうなこと…さあ…いただきます[とスプーンで食べ  
始める]…ああおいしい…不思議ねえ…毎日食べても食べ飽き  
ないわ…ほんとにおいしい…パク パク パク…[スプーンを  
置いて]ああおいしかった…ごちそうさま[一礼したとき鍋から  
少しおかゆが見え出す]あらあ…おかゆがこぼれちゃう…もっ

たいたい もったいない…早く止めなきゃ…『小さいお鍋や止めとくれ』……あら…どうしたのかしら…声が小さかったのね…[前より大きな声ではっきりゆっくりと]…『**小さいお鍋や止めとくれ**』…[もちろん止まらず、その間にもおかゆは鍋からあふれどんどん出てきてテーブルを覆ってしまうのであわてて]まあ…どうしましょう…呪文が違っていたのね…では『大きいお鍋や止まってね』『大きいお鍋やよしとくれ』『大きいお鍋や戻ってね』[その間にもおかゆはどんどん増えて舞台全面に広がりお母さんパニック]うわあーっ 助けて…[おかゆに飲み込まれる]



語り 「[舞台中おかゆが揺れ動いている]さあ大変 お母さんが呪文を一文字間違えたのでお鍋はいつまでもいつまでも グツグツグツグツグツ…おかゆを煮ていたのだから おかゆは お鍋のふちからどんどんこぼれ出てきた…グツグツグツグツグツグツ…台所がおかゆでいっぱいになり…グツグツグツグツグツグツ…家じゅうがおかゆでいっぱいになっても…グツグツグツグツグツグツ…家の前の道も 隣の家もおかゆでいっぱいになっても…グツグツグツグツグツグツ…お鍋はまるで世界中をおかゆでお腹いっぱいにしてしまいたいと思っているように いつまでもいつまでも…グツグツグツグツグツグツ…おかゆを煮続けているものだから 町じゅうが大騒ぎになってしまいました…[語りの間に町の人や動物たちが次々おかゆの中から顔を出して消える]でも だーれも どうすればいいかわかりませんでした…とうとうおかゆの流れこんでいない家は町であと一軒…ということになった時 ほら…女の子が帰って来ました…[女の子が上手袖に登場]そして たった一言…どうぞっ[と女の子を紹介]



女の子 「小さいお鍋や止めとくれ…」

■ エピローグ ■

語り 「女の子がそういうと お鍋はピタッと煮るのを止めました…

[おかゆ動きを止める]でもねえ…それから長い間…この町へ帰ってくる人たちは 自分の通る道をパクパク食べて 食べて 食べ抜けなければなりません…おしまい」

#### 演出ノート

- グリム童話で有名…おはなし会ではよく素話の演目とされる
- 本来語り聞かせに向けた話だが、このバージョンでは進行役の語りですすめながら、見せ場(特におかゆが町にあふれ出る場面)を人形劇とするパターンを試みた
- お母さんが止める呪文を言い間違える演出にした…お母さんのあわてぶりを観客に楽しんでもらいうことで正しい呪文を言えない不自然さを感じさせずにすませたい(思い込みから修正がきかなくなることは実際ありがちである)
- おかゆに見立てる布はテーブル内に収納しておき、裏から徐々に出して広げて行く…最終的には舞台全体を隠してしまうぐらい大きい方がインパクトがあり印象的になると思う…どんな布がおかゆに見えるか…考えながら選ぶのも楽しいだろう
- おかゆにおぼれる町の人や動物はなんでもよい…(布のあちこちに切り込みを入れておき、そこから顔を出す演出がおもしろい)
- 二人で操作する場合、一人が女の子と舞台変換を担当し、もう一人が語り、お母さん、おばあさんの三役を演じるとよい
- 出演者が3名以上いる場合は語り手を独立させた方が落ち着くと思う